

大東文化大学 博士学位論文審査報告書

氏 名 丁 成東

学 位 博士（書道学）

学 位 記 番 号 甲第118号

学位授与年月日 平成27年3月20日

審 査 研 究 科 文学研究科

論 文 題 目 中国装演史の研究－文献史料を中心として－

論文審査委員 (主査) 大東文化大学教授 安達 直哉
(副査) 大東文化大学教授 澤田 雅弘
(副査) 大東文化大学教授 高城 弘一
(副査) 成城大学文芸学部 特任教授 中野 照男

丁 成東博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

1、論文の要旨および特色

本論文の構成を目次によって概観すると、以下の通りである。

一、序論

- (一) 研究の目的
- (二) 先行研究の歴史と諸問題
- (三) 研究の方法
- (四) 装潢に関する語をめぐって

(五) 中国書画装飾の起源

1. 「簡冊(策)」説 2. 「帛画」説 3. 「屏風」説

二、本論

第一章 南北朝時代

- 一、はじめに
- 二、形制の整備
- 三、書跡の編次整理
- 四、材質の分類
- 五、包首(表紙)の材質
- 六、押署の制
- 七、小結

第二章 唐代(隋代を含む)

- 一、はじめに
- 二、三大形式の確立
 1. 巻軸(卷子)装 2. 立軸(掛軸)装 3. 冊頁(冊子)装
- 三、小結

第三章 宋代

- 一、はじめに
- 二、宣和装(北宋)
 1. 宣和装の形式と「宣和七璽」 2. 小結
- 三、官告の装飾(北宋)
 1. 官告の制度
 2. 官告の材質
 3. 官告格式一覧表
 4. 小結
- 四、『画史』『書史』に見られる米芾の装飾観
- 五、紹興装(紹興御府書画式)(南宋)
 1. 内府装飾の形制
 2. 修復の三原則
 3. 小結

第四章 元代(遼・金を含む)

- 一、はじめに
- 二、遼代の装飾
 1. 実物資料 2. 絵画資料
 3. 彫塑資料 4. 小結
- 三、金代の装飾

- 1. 「明昌装」の特徴―「明昌七璽」
- 2. 『金史』「官誥」に見る金の装潢
- 3. 小結
- 四、元代の装潢
 - 1. 史料にみる元代の装潢
 - 2. 書画資料に見る元代の装潢事情
 - 3. 小結
- 第五章 明代
 - 一、はじめに
 - 二、装潢形式の多様化
 - 1. 巻軸（卷子）装
 - 2. 立軸（掛軸）装
 - 3. 冊頁（冊子）装
 - 三、蘇裱の確立
 - 1. 「蘇裱」隆興の背景
 - 2. 「蘇裱」の形式
 - 3. 「蘇裱」の材質
 - 四、『装潢志』に見られる周嘉胄の装潢観
 - 五、小結
- 第六章 清代
 - 一、はじめに
 - 二、宮廷の装潢
 - 1. 巻軸（卷子）装
 - 2. 立軸（掛軸）装
 - 3. 冊頁（冊子）装
 - 三、民間の装潢
 - 四、小結
- 三、結論
- 文献一覧

以上が目次の概略である。以下、上記の章立てに沿って内容を略述する。

本論文は全六章から構成され、その前後に序論と結論を配置する。

一、序論

まず本論文の目的と意義について述べ、既往の研究を概観し、本研究の位置付けを行う。中国の書画装潢の歴史を明らかにしようとする時に、それに関する研究はほとんど技巧を中心とするものばかりで、通史的な研究はいまだ不十分である。なぜなら、装潢技術は、師匠の「口伝心授」によって授けられるため、文字記載の史料が実に少ないからである。そのうえ、この少ない装潢に関する史料は歴代の書論・画論と膨大な筆記・文集に散見しているばかりでなく、文字の論述は抽象的なものであるため、具体的な表現としては現れ

ないことが多い。そのため、本論文は、中国の南北朝時代から清代における書画装飾の実態とその変容過程を、主として文献史料の解読と分析に基づいて実証的に考察していくものである。この成果は、古代（伝統）の装飾技術が含まれている今日の装飾技術に対して非常に参考となるものとされる。

ところで、装飾の歴史の中で、同じ装飾部位の名称は時代が異なると呼び方が違うばかりではなく、意味が変わってくる場合もある。そのため、本論文では文献に現れた装飾に関する様々な用語を収集整理するとともに、「装飾」という語の初出について、南朝梁・沈約『南齊禪林寺尼淨秀行狀』にみられることを指摘した。なお便宜をはかるため本論文では様々な装飾用語から「装飾」の語を使用するとした。

また中国の装飾の起源については、文献に明確に記載されていないが、おおよそ「簡冊（策）」説、「帛画」説、「屏風」説の三つの説があり、それぞれについて検討した。

二、本論

第一章 南北朝時代

この時代は装飾（卷子）の初歩的確立期とした。

宋・齊・梁・陳の四時代には、内府に収蔵された書画はいずれも修復されたが、基本的に巻軸（卷子）にするという形式が確立した。

宋の孝武帝の時に、それまでの数十紙を一巻に仕立てていた状況を改め、十紙で一巻とした。さらに明帝の時には、卷子の長さを二丈に定めた。また鑑賞上の効果を高めるため装飾の順番に工夫を凝らした。すなわち、一巻の中では、好いものを巻頭に据え、下品のもをその次に置き、中品のもを最後に配した。さらに、卷子の軸首と軸木を重視し、本紙の材質と内容の優劣によって軸首等を選定した。梁時代には青綾の包首（表紙）を取り入れた。また宋朝の内府では書跡を整理する際に、はじめて「押書」の制を実施し、「鑑識芸人」が修復した書跡に署名し、これを収蔵や鑑定の上とした。後の唐代に「貞観」の印を紙継目に押すことや宋代の「宣和七璽」などに影響を与えたとした。

第二章 唐代（隋を含む）

この時代は装飾の基本形式の確立期と位置付けた。

唐代では装飾技術はすでに高いレベルに達している。貞観・開元年間には、内府の図書は一律に、白檀の軸木、紫檀の軸首、紫の羅の装飾裂、織成の巻緒を取り入れるなど、宮廷の装飾形式はすでに定式化した。また、見返しと本紙のあいだに「引首（隔水）」を挿入したことは隋代と異なる点である。

中晩期には巻軸のほか立軸（掛軸）、冊頁（冊子）が登場し、装飾の三大形式が基本

的に確立した。立軸については、天地、八双、軸木および軸首などがすべてそろい、天地の比率は約二対一となっていたが、その材質等のレベルはまだ低いものであった。冊頁については、経摺装が最も早く現れた装飾形式であり、後に発展して胡蝶装の形式に変化した。胡蝶装は、書籍制度上の一つの大きな発展であると認められた。

第三章 宋代

宋代は装飾の黄金期として最も高く評価した。

それまでの伝統を受け継ぎながら、三大形式が日に日に完全になりつつある一方、また独自の新しい形式（宣和装・紹興装）をつくり出し、芸術的完成度は、装飾史上で最も高いレベルに達した。そのため後世の書画装飾の規準を確立したとされる。

徽宗の時、所蔵する書画について改めて鑑定と装飾が行われた。後世ではこれらの書画に施された装飾形式を「宣和装」と称した。宣和装の顕著な特徴は、本紙の周りの特定の位置に鑑蔵印「宣和七璽」を押すこと、また巻軸の標準格式を五段としたことである。すなわち、青緑色綾子（綸子）の天、黄絹の前隔水、画心（本紙）、黄絹の後隔水、紙箋の拖尾である。さらに立軸の特徴は二色裱であると指摘した。

官告については今まで制度史では重要視されているが、装飾の史料としては深く研究されていないので、それらを利用し、さらに藤井有隣館蔵北宋元祐三年（1088）「范純仁告身」を用いてその材質や形式をまとめた。

次いで米芾について、先行研究は多く書画と書画理論を中心とするが、『画史』『書史』などを通して、米芾の装飾観（書画に対する保護意識や修復方法など）を新たに明らかにした。

南宋に入って、紹興御府に収蔵された書画は、年代・優劣によっていくつかの等級に分けられ、それにふさわしい材質や装飾裂の紋様が定められた。「宣和装」を踏襲しつつ細かな形式が決められたという。

第四章 元代（遼・金を含む）

この時代は装飾の保守期とした。

遼代の装飾は基本的に大きな発展がなく、いくつかの実物資料をみても、その形式は唐時代と同じであると述べた。

金代の装飾は「宣和装」の形式を踏襲したが、ある程度の時代的特色を帯びている。特に章宗朝になると「明昌装」が現われた。「宣和装」を真似て、一定の位置に「明昌七璽」を押し、章宗が自ら題簽に題したのが特徴である。

元代の装飾形式は卷子・掛軸・冊子を中心とするが、後期になって、「中堂」という掛軸の形式では本紙の上端に多くの方が題跋をするための洒金箋の「詩堂」が加えられた。

裂の紋様や色彩は唐宋時代のものとは比べてみればシンプルであった。たとえば色遣いには黄・藍・白・黒の四色を取り入れており、前代と大いに異なっている。しかしながら、元は基本的に宋の装潢を踏襲して大きな発展がなく、特に末期に入るといっそう衰微したと評する。

第五章 明代

明代は装潢の復興期と評価された。その装潢は宋代の風格を踏襲する一方、新しい要素を取り入れて不十分な点を改善し続けた。

巻子の最大の特徴は、本紙の前に一段の「引首」を加えること、および天地に絹で覆輪することである。掛軸の形式は多様化し、倣宣和装・綾圈綾天地二色装・絹圈絹天地二色装・画心上鑲詩堂装・屏条装・対聯装などが生まれた。また天地と隔水の寸法は宋元時代と比べると明らかに長くなった。冊子の形式は推蓬装・胡蝶装・経折装などがあり、その中では胡蝶装が最も多く使われたが、初めて摺扇を冊子装に改装した扇面という新しい形式が生み出された。

一方で、地域色を帯びる装潢流派が相次いで現れ、装潢の形式の多様化を促した。後世に最も注目される「蘇裱」では、仕立てが優れ、装潢裂の選択や色彩に凝っている点に特色がある。全体的にあっさりしているが上品な趣があるため、文人達に評価されたとする。

第六章 清代

清代は装潢の多様期と位置付けられた。なお今日まで伝わってきた歴代書画の多くは清代に改装されたものばかりである。

清代宮廷の装潢は、ゆったりして質朴で単純なスタイルではあるが、乾隆期に最高レベルに達した。嘉慶期はある程度乾隆期の装潢の特徴を引き継いだ。全体でも細部でもいづれも簡略になって、乾隆期とは比べものにならない。その後の宮廷書画の装潢は、皇帝の興味が移ったのと国力が衰えたため、次第に衰微していった。道光期以降の宮廷装潢は民間装潢に劣る有様であった。清末の宮廷装潢では見た目の豪華さだけに酔い、織物を簡単に積み重ねるのみで質の低下が著しく、芸術的品位の低下も隠せず、それまでの宮廷の装潢の豪華でありながらも荘重な風格はすっかり失われたとした。

また、清代では民間装潢と個人のコレクションの装潢はシステム化と標準化という特徴を持って発展したと述べる。

三、結論

以上の考察を通じて、極めて限られた史料を利用して、各時代の装潢の実態を明らかにし、中国装潢史の全体像をつかむことができたとする。

総じていえば、装潢の歴史は時代の発展、興廃と軌を一にするものである。装潢はある時代に突然現れ発展したものではなく、直接あるいは間接的に各時代の制度、社会の生産条件、書画の発展などの諸要素の影響を受けている。また実用の目的から生まれた装潢は、審美がその発展のひとつの原動力となり、実用性を保ちつつも芸術性も重要視されていく。

本論文は、今日の書画装潢を再認識すること、あるいは文化財の保存修復にも大きな意義を持つと述べ結んでいる

2、論文の審査内容および評価

まず序論において研究の目的と方法が明確に示されている。今までの装潢に関する研究が技術的側面に偏ると批判し、南北朝時代から清時代までの各時代の特徴とその背景を明らかにし、しかもその歴史の変遷を辿ろうとした点は評価された。さらに今までの装潢に関する用語の使用法に統一がとれていなかった点に着目し整理を計ったこと、特に「装潢」という語の初出について南朝梁の書物の中に新たに見出したことに目新しさがある。

本論第一章では、南北朝の宋・齊・梁・陳の時代に、内府に収蔵された書画の修復に際して巻軸（卷子）にするという形式が確立されたこと、続いて第二章の唐代を丁氏は装潢の基本形式の確立期として、特に中晩期に巻軸のほか立軸（掛軸）、冊頁（冊子）が登場した点を文献史料の詳細な検討から明らかにしている。

第三章の宋代を丁氏は最も評価し、装潢の黄金期としている。すなわち、卷子・立軸・冊頁の三大形式が発展する中で、独自の新しい形式（宣和装など）が生まれ、芸術的完成度は、装潢史上で最高のレベルに達したとする。そのため後世の書画装潢のための規準を確立したという画期的側面を明らかにした。官告については、制度史の研究では重要視されているが、装潢の史料としては深く研究されていないので、それらの旧知の史料を利用しかつ新史料の発掘にも努めて、その材質や形式をまとめた。さらに『画史』『書史』に見られる米芾の装潢観を述べ、この見方が現代の装潢観とも通ずるものがあるとしたことは、米芾の新たな評価を導き出したもので貴重である。

第四章の元代（遼、金を含む）は装潢の保守期という評価であるが、ここでは今までほとんど触れられることのなかった遼や金の装潢の実態を明らかにした点が大きな成果である。文献史料のみでなく絵画等の実物資料の新たな活用の仕方も妥当である。

第五章の明代を装潢の復興期と位置づけ、卷子・立軸・冊頁の形式それぞれに多様化した側面あるいは新たな形式を付け加えたことを指摘する。さらに地域色を帯びる装潢流派が現れ、特に「蘇裱」を代表的なものとして詳しく検討している。文献史料の丹念な読みこみから具体的な実態を明らかにしたといえよう。また周嘉胄の装潢観については他に例をみない研究である。

第六章では、清代は装潢の多様期であると位置づけ、今日まで伝わってきた歴代書画の多くは清代に改装されたとする。宮廷の装潢は、乾隆期に最高レベルに達したが、嘉慶期には全体でも細部でもいずれも簡略になり、その後は次第に衰微したとする。また、民間における装潢の発展を評価した。

このように本論文では、各章の結論は明確であり、全体として中国装潢史の変遷が跡付けられている。現在まで、確実な文献史料を収集し読解しながら各時代の装潢の特徴を明らかにし、このような歴史全体を通じた装潢の変遷を解明した成果は皆無であったので、本論文の価値は高いと見てよい。それを論証するために今まで使われていた文献史料の新たな解釈を導いたり、かつ新たな史資料を発掘したことは評価される。

さらにこの装潢の歴史を、実用の目的から生まれたものの、審美がその発展のひとつの原動力となり、実用性を保ちながら芸術性も重要視されて発展していく過程ととらえ、また各時代の制度、社会の生産条件、書画の発展などの諸要素の影響を関連付けて考察しようとしたことは十分とはいえないが、その試みはよいであろう。

このように装潢の各時代の特徴と変遷を明らかにして、今日の書画装潢、ひいては文化財の保存修復に役立てようとした意図は、一定程度達成されていると思われる。

しかしながら、修正すべき点がいくつか残されている。

まず先行研究の整理が簡略すぎ不十分であるとされ、たとえば官告の項では歴史家の論文の参照が不可欠であることが指摘された。この欠点は氏の説が先行研究の説と明確に区別されていない箇所があることと関連する。この点を明確にすることが望まれる。

全体として統一がなされていない記述があることも指摘された。引用の仕方、注の付け方、ある図版には典拠が示されないとかの問題を解決する必要がある。

また資料の扱いに関して、一部に訓読の正確でない箇所があること、後代になればもっと類書など広く収集すべきであることなどの意見が出された。

最後に清代の記述について、時間の制約もあったためか、文献史料や実物資料の収集が不足していること、民間装潢の実態や位置づけが十分に明らかになっていないことが指摘され、本論文では附説か補説とするのが妥当であるとの意見の一致をみた。

しかし、日本語表現の訂正を含め以上のような修正を施せば、本論文は壮大な目標を掲げ、先行研究の不備を補う労作であり、今後の研究の深化が期待できるものと評価された。

3、結論

審査委員会は、2月9日に本論文に関する口述試験を行った。そこでは、各委員が本論文の細部に至るまで質疑したのに対し、氏は的確に回答することができた。そのため最終的に審査委員会は全委員一致で、口述試験が合格であると判断した。以上の審査内容および評価に基づき、本論文を審査の対象とする博士学位審査委員会は、丁成東氏が博士（書道学）の学位を授与されるに適格であるものと判断し、ここに報告する。